

# 学部教育におけるアカデミック・ライティング講義の基礎研究

古内 潤一

(京都大学大学院経済学研究科)

**1. はじめに** 本稿は、日本語によるアカデミック・ライティング入門講義(2007年度前期、竹澤丈祐准教授担当)に関する報告要旨である。報告者は、これから学部教育で基礎的なアカデミック・ライティング(以下、AC と略記)教育を行いたいと考えておられる教員の方々などに今後の参考の一助となるような報告を行いたいと考えている。本報告は、ティーチング・アシスタントの視点から講義の実際と参加した学生の反応を紹介することに主眼を置いているが、それはこの講義を受けた学生たち(1回生)が、その後の各講義やゼミで求められるレポート及び論文執筆の礎となる力を身につけたからである。このことから本報告は、AC 教育が経済学部内の専門の枠を超えて実施された例を紹介するものとして、さらには実践に頼ることが多い現状の中で基礎的な訓練の場を提供した例を紹介するものとして、位置づけされるものとする。

**2. AC 講義の実際** 2007年度のAC入門講義は参加人数11名を集めて行われた。講義は「①前回の復習と提出課題へのコメント、②学習課題についての説明、③学習課題についてのグループ・ワーク、④学習課題のまとめ、⑤復習の指示、⑥課題の提示」から成る。この報告要旨では②、③、⑥を中心に、講義の内容をまとめていく。

**2-1. 学習課題の内容と狙い** 講義は全12回行われ、その配分は、履修ガイダンス1回、基礎編(5回)、応用編(5回)、全体のまとめ1回であった。毎回の講義で担当者からレジュメが配布され、その補足と復習には戸田山和之(2002)『論文の教室—レポートから卒論まで—』(日本放送出版協会)が使用された。

**基礎編の内容** 基礎編はAC全体のイメージを構築していきながら、最終到達点をアブストラクトの作成に定めている。担当者は、ACの能力を「形式(問題提起、説得性、論理的一貫性、適切な引用など)の取得と、その形式に従って文章を書く練習をして初めて鍛えることができる」と定義し、その形式の大枠を概説することで、アブストラクトに必要な要素、という議論につなげていったのである。

こういった狙いをもちつつも、多くの時間が論証部分に充てられた。基礎編では、接続構造(転換、制限、譲歩、対比)に重点がおかれ、適切な接続詞を埋めるトレーニングなどが行われたのである。1回生にとって、接続構造は比較的馴染みのある思考であると思われるが、それが理由でACの中の接続構造というよりも、接続詞そのものの問題としての理解に留まってしまう面も見られた。この点については、グループワークで提出されたワークシートの内容について触れる際により詳述したい。

**応用編の内容** 応用編は、基礎編の到達点であったアブストラクトの議論を発展させることから始まった。つまり、アブストラクトの作成→目次の作成(箇条書き)→パラグラフの作成というような手順である。この一連の流れの中で、基礎編で触れられた問題提起と論証部分の内容をさらに掘り下げていくことに焦点があてられた。

基礎編では問題提起の位置づけが確認されたが、応用編では議論の論理性や結論の質を

高めるために、問題提起の方法が説明された。担当者は問題提起をコミュニケーション方法の選択であると説明し、その方法の種類を①立論、②批判、③異論に分けて適切な問題提起を行うことの重要性を指摘した。この問題提起の説明は次のパラグラフ・ライティングの説明につながっていく。つまり大きな問題提起が小さな問題提起に分節化できることを示し、この問題提起群をパラグラフ・ライティングの思考につなげていったのである。

講義の終盤は、このパラグラフ・ライティングの大部分を占める論証の充実を図るために、引用・参照・註の概念が詳しく説明された。これらの概念は形式上の問題及び、執筆者の効果的な問題提起のために必要となるからである。担当者によれば、これらの概念は読み手にとっての「検証可能性の確保」へとつながり、また書き手にとっては効果的な問題提起の提出へとつながっていくとされる。この概念の説明が上記の問題を扱っていると同時に、剽窃行為に対する警鐘として機能していることは言うまでもないだろう。

**2-2. グループワーク** グループワーク(以下、GW と略記)は講義中に随時実施され、1 回当たり 10~15 分で行われた。この GW は、講義における抽象的理解を実践に生かす橋渡しを目的として実施されたが、実際に参加した学生は実践の困難さに当惑しつつも、提出課題へとつながるような足跡を残した。

GW の目的は、能動的な学習経験の機会の提供である。AC という講義の性質上、抽象的説明と理解だけでは不十分だからである。その内容は、例えば目次を作り、各章で議論される内容を検討したり、接続詞の使い方を議論し合ったりした。GW で学生同士が話し合った結果は、講義時に配布される授業用ワークシートに各自が記入することになっている。報告においては、この GW の成果をワークシートの記述などから検討していきたい。

**2-3. 課題提出** 課題は、全 12 回の講義のうち 6 回が課された(その内、1 回は任意提出)。その内容は、①剽窃したレポートを分析させるもの、②主題の設定と目次(議論内容の提示)の作成、③アブストラクトの分析、④論文の分析(電子ジャーナルから論文をダウンロード)、⑤「大学におけるレポート試験について論ぜよ」というテーマからレポートを作成、⑥「アカデミック・ライティングと剽窃の関係」に関するレポートの作成、であった。各課題は 2-1 で示した講義内容を踏まえ出題されており、採点基準もそれに則っている(導入部における問題提起、議論の順序、結論の有無、引用・参照の適切な使用など)。

採点結果は第 1 回こそ平均点が 6.36 点(10 点満点)に留まったが、それ以降は 7 点台前半から 8 点台後半の間で推移した。2~3 点、点数が上下動した学生も 2 割ほど見られたが、これは考え方を理解していても実践に生かすには時間を要することを示している。こういった学生が後年、本講義をどのように評価するのかは興味深いテーマであり、調査してみたいと考えている。

**3. AC 講義における工夫とは** レポートや講義に関する書籍は多数出版されているが、このような講義が学部教育の現場で行われている例は少ない。したがって、本報告では学部教育において AC 教育の必要性を感じておられる方々と本講義の内容を共有し、さらに講義をよりよいものとするための改善点を議論したいと考えている。担当者も言及しているように、こういった講義を現実化する場合、評価基準の問題よりも受け手の学習を促すような工夫がより一層求められるため、多大な労力が必要とされる。本講義においては、その工夫が GW、ワークシートの活用、課題へのコメントに現れているが、報告ではこれらの実際を学生の反応を中心にして出来る限り紹介していきたい。